

17 世紀後半に建てられた大雄宝殿は、僧侶が仏教の神々を尊重する儀式を行うための主な建物となっている。本尊には歴史ある釈迦牟尼の仏像が描かれているが、それ以来取り壊された建物から集められた他の彫像も収められている。黄檗宗は中国の影響を受けた要素がいくつか見られる。堂内の全ての仏像は、仏師によって中国様式に彫られている。床は日本の建物でよくみられる畳敷きではなく、石灰漆喰と粘土の土の床である三和土である。黄檗の僧たちは跪いて読経するのではなく、立って読経をしている。格子天井にも、中国の建築様式の影響を受けた黄檗宗の特徴が表れている。